

大学キャンパスの建物が保存と解体のはざまに揺れている。貴重な建物が取り壊される例は後を絶たないが、企業や行政と連携し、新たな保存活用の取り組みも始まっている。



■ 3月から解体工事が始まった学習院大学のピラミッド校舎(東京都豊島区)
■ 名古屋大学の豊田講堂は改修されてかつての美しい外観を取り戻した(名古屋千種区)



消えゆくキャンパス建造物

優先される経済性

「教育の場だからこそ、経済性ではない違った視点で建築の価値を見だし、残す選択ができなかったのか」。今年三月から解体工事が始まった東京・豊島の学習院大学ピラミッド校舎(ピラ校)。保存活用を訴えてきた松隈洋京都工芸繊維大学准教授は、そう言いつつ肩を落とす。

ピラ校は一九六〇年、建築家の前川国男が同キャンパス内に学問の「核」を作る意図で設計した。四棟の建物が囲む中庭にピラミッド型の大教室棟を据えるプランは、戦後日本の大学キャンパス計画の中でも「極めて珍しい試みだった」(松隈准教授)。

低層のピラミッドという奇抜な外観は、日陰を少なくして開放感を醸すための工夫だ。教員の一人も「都心の建物としては効率的でないが、キャンパスのシンボルとして

伝統校舎保存問われる知恵

残すおほかさや余裕を大学がなくしたということ」と残念がる。跡地には地上十四階建ての中央教育研究棟(仮称)がそびえ立つ予定だ。

各地で少子化を見据えたキャンパス整備計画が急ピッチで進み、古い校舎の建て替えが相次いでいる。

チェコ出身の建築家アントニン・レーモンドがキャンパ

スの全体計画を手掛けた東京・杉並の東京女子大学では、二四年に完成した東寮が昨年取り壊された。旧体育館の解体も予定されており、卒業生らを中心とした保存活動が今も続く。東京・日生劇場の設計で知られる村野藤吾が手掛けた早稲田大学文学部校舎も解体前の準備工事中だ。

企業の支援で再生

一方、企業の支援で校舎の保存が実現したり、行政との連携で解体寸前の建築が救われたりしたケースもある。

今年二月、大規模な改修工事を終えてよみがえったのが、ピラ校と同じ六〇年に完成した名古屋大学東山キャンパス(名古屋・千種)の豊田講堂だ。丘陵地帯から市街を見下ろすように立つ建物は、「門」の文字をイメージして建築家の榎文彦が設計した。

「豊田講堂と聞けば、誰でも分かるシンボルタワー」(杉

浦康夫副総長)は、トヨタ自動車工業(現トヨタ自動車)が寄贈した。今回の改修もトヨタとグループ企業の寄付で実現した。ほぼ半世紀を経て老朽化し、人の声や音が聞こえにくいという機能面の問題も抱えていたが、キャンパスの整備計画の中で研究施設の新築などが優先され、「寄付なしでは改修はできなかった」と杉浦副総長は言う。

改修では、隣接する建物との間のすき間に屋根をかけて空間を広げ、ホール内の音響装置や同時通訳ブースを整備した。プロの交響楽団や団体への貸し出しも検討し、杉浦副総長は「建物を長く使っていくための維持管理費用に充てられれば」と期待する。

宮崎県都城市では昨年、老朽化で取り壊しが決まっていた都城市民会館が南九州大学によって救われた。建築家の菊竹清訓が「メタボリズム(新陳代謝)」という建築思想を体現した同会館が、来春に都城キャンパスを新設する同大学の目に留まり、市民対象の生涯教育の場などとして活用されることになった。

市と大学はアスベスト除去